

戦争と国家性

—中東は一体どうなっているのか—

長崎大学 ギュルベヤズ・アブドゥルラッハマン

War and Statehood

—What on Earth is Going on in the Middle East?—

Abdurrahman Gülbeyaz (Nagasaki University)

Abstract

This paper is a slightly modified written version of the author's speech given on 28 May 2019 at the symposium "Future of Peace Education: Connecting Hawaii and Nagasaki", which was held on the Bunkyo Campus of Nagasaki University.

The text is comprised of four sections. In the first part, on the basis of a mental experiment, a brief radical-critical depiction of human being and human civilization is undertaken. The second part deals with the phenomenon of war in its organic and interdependent connection to state and statehood.

The focus of the third section lies on the concept of peace. Embedded in the context of the history of so-called "Western Civilisation", a small selection of prevalent philosophical, theoretical and theological approaches to 'peace' are critically reassessed.

What the author of the text at hand thinks about peace and the possibility of its realisation is outlined, in a rather cursory manner, in the short closing section.

Key Words: Statehood, War, Peace, Language

1 序

地上に居住する聡明なる人々は、自らの置かれている状況、つまり、彼ら自身が何者であり、何を行うのかということや、その業績と勲功のもたらす本質や帰結を認識する能力がないのか、あるいは意識的に認識を忌避しているかのようです。

もしも、虐げられ、憂うべき状況にあるこの「男と女の惑星」を、地球外の知的存在が謙虚に間近に観察したならば、地球を支配する種族が自然によって与えられた思考・言語という能力を—唯一の目的ではないにしても—専ら生命破滅のために用いていることを、

即座にそして落胆をもって理解するでしょう。

それ（地球外生物）は、世界の支配者たる人間が「文明」と呼ぶものの唯一の基準や尺度、つまり、すべての人間的、社会的活動の明確な価値を持つ目標が、破壊力のレベル、すなわち破壊の度合以外の何物でもない、ということに甚だしく当惑するか—少なくとも—全く非論理的だということを見出すことになるでしょう。

キュロス大王は彼の国家を当時最高レベルの文明に仕立て上げる「偉業」を成し遂げましたが、その過程で彼が遂行した戦争により死者の数は10万を超えました。アレクサンドロス大王は単に、国家創成、国家拡張のための幾多の戦争において15万の命を奪う記録を打ち立てたという理由から、キュロス大王よりもさらに偉大であったのです。

ちなみに、あの銀河間旅行者の‘非人的’知性は、人間の戦争犠牲者の統計が人間以外の生物の戦争関連死を完全に無視していること、つまり、人間の戦争中に人間によって殺された／殺されているそれら無数のウマ、ラバ、ラクダ、ロバ、イヌ、ネコ、ゾウなどが、統計に表れないことを見逃さないでしょう。

地球外生物は、さらに、文明の階梯において現在ある個々の国家の占める位置が大量破壊兵器の生産量と輸出量に直接リンクし、決定される—すなわち武器輸出が増大すればするほど国家は文明化され、また逆も然り——ということに察知するでしょう。

今日でも、相も変わらず、高度に文明化した国家の文明活動はこの惑星上のいたる所で、全速力で進行しています。つまり、世界中で戦争と広範囲の暴力的社会紛争が雨後の筍のように急増し、エスカレートしているのです。植民地主義の害を被り、貧困に苦しむ世界中の地域のみならず、西欧諸国も終わりがなき破壊の狂乱に見舞われています。この点において、東地中海地域、いわゆる中東は、そのような狂乱が集中的に出現し展開する社会的な時空連続体におけるハブとなっているようですが、たとえそれら狂乱が世界の別の場所に起きたとしても、少なくとも共鳴し、影響し合うものなのです。

2 戦争と国家

明白なことですが、この日本において私がわざわざ、戦争がいかに残忍で、破壊的で、悲惨であるか、などと力説したり強調したりする必要はありません。先の世紀の前半を通して実質的に間断なく戦争を遂行し、最後には、三百万人以上の死者を出して廢墟と化した国土において、それは明らかに不要なことだと少なくとも誰もがそう考えるでしょう。

ここであえてそのような説明や強調をするつもりはありません。その代わり、戦争と平和について、そしてこのペア同士の「国家：英語の state」という制度との宿命的な関係について、一般的な方法で話してみようと思います。私の言葉は、それが具体性を帯びる場合はいつでも、中東について、つまり「人類文明」と呼ばれる物の構成要素一つ一つとともに、国家とそして戦争までもが地上で最初に発明されたこの地域について述べることになります。

戦争という現象への一般に受け入れられているアプローチは「現実的、意図的、広範囲な政治共同体間の武力紛争である」という理解です。この文脈での「政治共同体」という語句は無条件で率直に「国家：state」と訳されるか言い換えられ、またそうすべきです。

一般的に戦争とは主権国家の専権事業です。つまり、基本的に国家間（interstate）もしくは政府間の行為なのです。これに関連して、どちらも国家を表す nation と state の非常に面倒な方程式を避けるために、国際を意味する「international」という修飾語を使いたくても思いとどまるようにお勧めします。この観点における例外的な（とまで言えるかどうかは判りませんが）問題事例は「内戦」と呼ばれるものしかありません。

しかし、いわゆる内戦の場合でも係争となっていることは国家体制以外の何ものでもありません。広い意味で内戦はとりわけ、かかる国家における体制そのものが、またはその体制の正当性が疑われていることを示しています。それはつまり、かかる領土内での社会生活全体を組織化し統治する権利を争うことの主張、あるいは「政治共同体」から離脱し自らの権利の上に立つ国家となることを希望する意思表示のいずれかなのです。

ドイツの政治家カール・フォン・クラウゼヴィッツはその有名な戦争論で、戦争は「別手段による政策の延長」¹であり「敵対者に、我々の意思に従うことを強制することを意図した暴力の行使」²と定義したうえで、戦争とは国家のゲームであると確認しています。

戦争とは、ひとことで言うと、国家の弁別的な動作モードにほかならないのです。

そして、中近東において進行中の戦争が件の国家ゲームにおいて歴史的な根源を持つばかりか、その地域で可能な限り最大の権力配分を得ようと互いに争う主権国家によって舵取りされ、操られているということは驚くに値しません。

ここで近代史を講義することは適当でないかもしれません。二十世紀の歴史は基礎教育の必須部分だということは知っていますが、それでも、この地域における進行中の危機の性質と国家体制の問題の間にある基本的な関連性をはっきりと示すために、次のような鍵となる事柄をいくつか心に留めておくのは有益であろうと思います：1) サイクス・ピコ

協定、1916年5月にイギリスとフランスにより密かに結ばれ、オスマン帝国が解体され、フランス統治地域とイギリス統治地域に分割されることになっていた；2）セーヴル条約、アメリカ、イギリス、イタリア、フランスの連合国により1920年4月にサン・レモにおいて策定・調印され、中東を最も好都合に分割する基本合意を具体化した；3）ローザンヌ条約、1923年6月24日に調印、続いて1922年10月11日にはイギリスとトルコ民族主義者の間で平和条約が調印された（10月2日、イスタンブールからイギリス撤退。10月29日、トルコ共和国が宣言された）。

現在この地域に存在する国家、トルコ、イラク、シリア、レバノン、ヨルダン、クウェート、カタール、サウジ・アラビアなどは、一つの例外なく二十世紀の産物です。それらはすべて今述べた条約の直接の帰結として1923年から1971年にかけて出現しました。つまり、強大な近代ヨーロッパ国家の国家的、政治的行動、クラウゼヴィッツに従えば「別手段による政策の延長」の範疇に収まる行動の結果なのです。

この地域において現在進行中の破壊に満ちた戦争は、単一の百年戦争の現状にすぎません。それは遅くとも1914年には始まり、顕著な中断を挟むことなく今日まで続いています。

目に見える戦争の表面に浮き出るのはイスラム国、ヒズボラ、自由シリア軍、ヌスラ戦線、ムハージール軍、シャーム自由人イスラム運動、イスラム軍、などなど、色とりどりの名前のごった煮状態であるにもかかわらず、現実には相変わらず同じひとつの国家ゲームなのです。相も変わらぬ国家体制の手荒な事業でなのです。参加する組織の名称や位置取りは変われども、現実の演じ手たちつまり二十世紀生まれの若い国家であるトルコ、サウジ・アラビア、カタール、イラン—そして昔からお馴染みの強大な西欧国家の面々は変わりません。彼らこそが実質的な戦争当事者なのです。

3 平和と戦争

戦争と平和は不可分の双子である、とすでにプラトンは述べています³。そのためプラトンの勤勉な弟子であり、世界征服者アレキサンダーの教師であったアリストテレスが戦争と平和の関係をさらに深いレベルで再編纂し、戦争を平和の必要条件の地位にまで引き上げたこと⁴は驚くにあたりません。

うぬぼれた西洋文明は誇らしげに自らの起源をアリストテレスの中に見出します。その名を轟かせた武人皇帝の教師であり、助言者であり、顧問でもあったアリストテレスは、

私たちが「余暇のために多忙になり、平和のために戦争をする」と全く同じことを論じています。現在において最も支配的な西洋文明の創始者である彼が「我々が戦争を遂行するのは平和の悦びを享受せんがためである」と言うのです。

何という深甚なる叡智！何という比類なき洞察なのでしょう！まさに近代的な知識生産方式の創始者・創案者アリストテレスの正統で誇り高き末裔である、と自称する者たちは事実、二千三百年と経たない現代において、膨大な量のロボット兵士やステルスジェット機、ドローン、レーザー装備衛星、対衛星ミサイル、その他の有象無象を生産しうる高度な進歩と繁栄を成し遂げています。

近代文明人は、アリストテレスやアレキサンダーその他、自ら選んだ祖先たちの名に恥じぬ生き方をしてきたと主張できるでしょう。彼らは勇猛な先人たちから引き継いだ平和生産技術の変革に加えて、比べるもののないほど効率的で全く新しい平和構築手段の開発にも成功しています。

アリストテレスの時代、つまり我々が西洋文明の黎明期において、小さくても頑強な盾や双頭の長槍などの当時としては革新的な平和装備にもかかわらず、平和構築に従事する装甲兵のうち一定数が戦場で命を落とすことは、単に平和構築任務のためには不可分な要素でありました。

今日ではしかし、近代人が独創的に発明し開発した「無人平和飛行機」や「自律／半自律平和兵器」などにより、ただ一人の命も危険にさらすことなく、一瞬にして何人でも殺し、殺戮することが可能です。かくして質的には前例のない強烈さで平和の喜びを経験するのはです。これは画期的ではありませんか？天の無垢なる詩篇なのではないでしょうか？

因みに、天国について言うなら、驚くほどのことでもありませんが、同一宗教である一神教、つまりユダヤ教、キリスト教、イスラム教の唯一神もまた、平和は死との交換で得るべきであると主張しました。神は、平和には対価が必要であり、対価は唯一の通貨、すなわち命で支払わなければならない、と要求したのです。程々の長さの永遠の時に沿って、無数の生きとし生ける物—男、女、子羊、牡羊、去勢牛、その他もろもろ—が自らの脂身、血、骨、髪の毛、そしてそれらの芳しい香を平和の供物として神の前に捧げねばならなりませんでしたが、しかる後に、根が疑り深い神は、「平和のための殺生という原則」に対して彼の僕（しもべ）の一部が持つ不満感情が重大な問題になりうることを認識しました。そして、平和は殺生を前提とすべきだ、とか、平和にはそもそも対価が必須だ、ということには何か不具合がある、と彼らが考えるのは結局のところ無理からぬことだ、という洞

察で折り合いをつける必要に迫られたのです。

神は、その全知遍在の記憶の中にある苦い過去の記録に照らして、不安な大衆をなだめるために無償の平和、つまり死後の来世における対価不要の恒久的な平和という革新的概念を、先手を打って開発しました。更に進んで、運用する上で相互補完的な二つの平和を関連づけました。一つは支払い対象の平和、もう一つは代金不要の平和です。勿論現世での平和には示された通貨で相当額の支払いが必要ですが、現世平和に対してより効率的に献身的に貢献すればするほど、より多く、より良い恒久的な無料平和の取り分が与えられることになるのです。

十七世紀の初頭以降、平和が論じられる場であった言語は劇的な変化を見せ始めました。そして、当時は啓蒙の良き予兆になると思われた言語が台頭し始めたのです。ホッブズは社会の平和と安全を市民の正式合意に基づく市民階級の創出に結びつけました。

カントは、既定の社会政治学、言語学、宗教の境界を越えて、社会契約というホッブズ的思想の視野を押し広げることで、地上における恒久的な平和状態の確立と維持を提示しています。彼は自由国家の連邦主義、国家同盟、国際法などを発案し、そしてホッブズの市民契約から出発し、普遍的な国家盟約、宗教上の契約などの方向に進みます⁵。カント的思考は、今日の欧州連合や国際連合機構の青写真となっているように思えます。

しかし明らかに、社会契約というホッブズ的思想も、汎地球的な契約というカント的提議も、切望される地上の平和の確立と維持には成功しませんでした。それどころか二十世紀と二十一世紀は「平和のための血」という例の基本原則によって支配される人類の所業の極致を目撃しましたし、今も見続けているのです。

4 閉会の辞

今も続く大流血の情景のただ中で、この構図にはまりきらない、幾分変わった語彙が台頭してきました。欧州フランス語圏哲学の少数の代表者により創り出されたこの独特な語彙は、中心部分が「他者」という語とその直接的派生語から成る、地味な概念の集合という手法を用いて、社会平和とその関連事象という人類の始まり以来の問題に取り組んでいます。

掻い摘んで言うと、レヴィナスら⁶の業績から見えてくる提案とは、自分自身を思案することを捨てて他者を思いやり、そして自身と自らの行いを他者に向けるということです。

あきらかに、これは「他者を認知／許容すること」とは異質なものです、では他者を構成するものとはいったい何なのでしょう？

ラカン⁷やある意味ではラランシュ⁸も含む前述の思想家の何人かと同様に、答えは単純で、つまり、言語なのです。

注

¹ Cf. Clausewitz 2007: 13 (脚注と、本原稿全体での日本語訳は著者による。)

² Ibid., 28

³ Cf. Plato 2015: 23.

⁴ 「繰り返しますが、すべての人生は仕事と余暇、戦争と平和に分けられることが可能であり、そして行われたものには、道徳的価値があるものもあれば、単に必要で有用なものもある。これに関連して、魂の諸部分にも、それぞれの行動にも同じ選択原則を適用するべきである。つまり、我々は、平和のために戦争を、余暇のために仕事を、高貴なもののために必要で有用なものを選ぶべきである。」 (Aristotle 1992: 434)

⁵ Cf. *Zum ewigen Frieden. Ein philosophischer Entwurf* [永遠の平和へ：哲学的な構想], in Kant 1977.

⁶ 「他者の全存在は、その外面性、というよりは、その他性によって構成されています。外面性は空間の特性であり、主体を、光を通して自分自身に戻す。[...] 他者は、例えば、弱い者、貧乏人、後家、そして孤児であるに対して、私は金持ちか有力者である。」 (Levinas 1987: 75-76, 83)
「他者についての私の定義は完全に異なっている。他者は、必ずしも親族ではないが、親族である可能性もある隣人である。」 (Levinas 1989: 294)

言葉は、理性の表明として、私と他者の中で私たちが持っている共通点を目覚めさせる。しかし、それは、その表現的な意図において、私たちの多性と私たちの二重性を前提とする。それは、存在間、彼らの言葉には入らず、それ（言葉）を差し出す実体間で実践される。

対話者の超越性と他者への言語を介したのアクセスは、人間が特異点であるということを示している。これは、ある概念の下に包含されているか、又はその（概念の）モーメントを発現するか個人の特異点とは違う特異点である。自我は言語に絶する、なぜなら、それが最優秀に話しているからである、応答的であり、責任感があるからである。純粋な対話者としての他者は、何らかの一般概念に基づいて理解することが可能で、その概念の対象となる、既知の、合意した内容ではない。彼は自分自身だけを参照して、物事に直面する。特異な存在間の会話によってのみ、存在と物事の個人間の意味、つまり普遍性が構成される。 (Levinas 1991: 25-26)

⁷ この問題は常に、他者が、探し探され、出会い出会う、目的であり、冗談を用いて届けられる平面において、言葉の仕組みと固く結び付けられていることを考えれば、この他者をどのように定義するべきであるか？ (Lacan 2017: 113)

我々は、他者（speech）の所在として定義した。この他者は主体が話すという唯一の事実を通じて制定され形をとる。この唯一の事実のおかげでその大きな他者が話の所在として生まれる。これは、しかし、それ（他者）が、その多性のままに主体として実現されることを意味しない。他者は、話があるたびに呼び出される。私はこれを十分に主張しているので、これをもう一度再考する必要はないと思います。しかし、この、我々の図式の上線において彼方発現される彼方は‘他者の他者’である。

これは、他者の地平線上で発現される話である。‘他者の他者’は、他者の話がそういうものとして形をとる所在である。それは我々から孤立される理由は何もない。

話の所在としての他者が、我々を自分の他者だと思ふ主体として、直接に、そして効果的に、我々に与えられるということは、そもそも、間主観的關係の根本である。 (ibid., 476)

⁸ 他者の異質性を維持するのは何か？ここで、ラカンの提唱の通りに、言語の優先順位を断言できるか？もし、私としては、それよりむしろ「メッセージ」の話をしたら、それは、少なくとも2つの明確な

理由のためである。第一に、メッセージは、言語であるとの同じくらい簡単に、非言語的である可能性がある。赤ちゃんにとっては、それは、主としては、非言語的である。第二に、「言語」を強調することは、他者の多性を、超個人的構造のため削除する。メッセージのこのカテゴリを説明するために、私はしばしば、フロイトが幼児に提供される初期データ—すなわち、幼児の経験の、自分自身のシステムに同化するように整頓し、‘通訳’する能力を直ぐに習得しなければならない部分—を記述するのに使う表現を強調した。Fliess への手紙(1896年12月6日)で使用される用語は『Wahrnehmungsszeichen』(知覚記号)である。この用語は、それらの通訳される予定の初期要素が知覚に与えられることを明確に示すが、これらの『Zeichen』(記号)の意味—と通訳に一関して、あいまいさを我々に抱かせる：それは、‘知覚的な指標’(index)か、それとも‘知覚的な記号’(sign)なのか？「指標」というアイデアを選択した場合、それらを状況の純粹に客観的な—幼児が追加の何かを識別し、その現象に関するより完全な見方を得ることを可能にする程度に幼児に特化された—要素として見なすことに導かれる。フロイトは、我々がここで「インデックス」(そのシニフィエと純粹に外因性の関係にあり、そしておそらく知覚主体の知覚全体から隔離されている何か)という用語で示す関係を超えていないと言える。ただし、他方では、「知覚記号」と訳して、はるかに生産的な意味を付与することもできる。これらの要素は、状況の単なる副作用又は状況の付随的詳細でなく、むしろ、メッセージの送信者に由来し、二重の関連した意味での記号(sign)を作成する。それらは、記号(sign)の力を獲得する。これは、送信者によって隔離され、主体に宛てられているためです。(Laplanche 2005: 74-75)

引用文献

- Aristotle. (1992) *The Politics*. Translated by T. A. Sinclair, revised and re-presented by Trevor J. Saunders. Penguin Books, London.
- Clausewitz, Carl von. (2007) *On war*. Translated by Michael Howard and Peter Paret; abridged with an Introduction and Notes by Beatrice Heuser. Oxford University Press, Oxford.
- Kant, Immanuel. (1977) *Werke in zwölf Bänden*. Herausgegeben von Wilhelm Weischedel. Suhrkamp, Frankfurt am Main.
- Lacan, Jacques (2017) *Formations of the Unconscious. The Seminar of Jacques Lacan, Book V*. Edited by Jacques – Alain Miller, translated by Russell Grigg. Polity Press, Cambridge.
- Laplanche, Jean. (2005) *Essays on Otherness*. Taylor & Francis e-Library, London, 2005.
- Levinas, Emmanuel. (1987) *Time and the other [and additional essays]*. Translation of: *Le temps et l'autre*. Translation by Richard A. Cohen. Duquesne University Press, Pittsburgh.
- Levinas, Emmanuel. (1989) *The Levinas Reader*. Edited by Sean Hand. Basil Blackwell, Oxford, Cambridge.
- Levinas, Emmanuel. (1991) *On Thinking-of-the-Other entre nous*. Translated from the French by Michael B. Smith and Barbara Harshav. Columbia University Press, New York
- Plato. (2015) *Laws 1 and 2*. Translated with an Introduction and Commentary by Susan Sauvé Meyer. Oxford University Press, Oxford.